

新年特別講演会

神奈川県三重塔と五重塔

江戸の歴史研究会副会長 川崎 克美

1. 仏塔の起源と変遷

日本の三重塔・五重塔の起源は、サーンチーの塔と呼ばれている印度中部ラーイセーン県サーンチーにあるストゥーパ（仏塔）です。

紀元前3世紀アショーカ王は釈迦の遺骨をサーンチーの塔に納めました。

サーンチーの塔は仏教の創始者釈迦の遺骨（仏舍利）を納めたお墓です。

現在のサーンチーの塔は、アショーカ王が造ったストゥーパを紀元前1世紀頃に改修、拡張したものです。

ヒンズー語のストゥーパ（仏塔）は、中国で音訳され卒塔婆（そとうば）となり、それが略されて「塔」になりました。ストゥーパは、中国に渡り楼閣建築と合体して高層塔の形式となりました。

中国・西安市の大慈恩寺には652年に建立された七層の大雁塔があります。

日本の仏塔と違って、中国の仏塔は各層に仏像などを安置し、最上層に登ることが出来ます。また、中国の仏塔はその多くが磚（せん）（磚、甗）という焼成した煉瓦で作られています。朔州市の仏宮寺には中国で唯一、木造の応県木塔（1056年）があります。

韓国の仏塔は石造りが多く、俗離山法住寺には1624年建立の、韓国で唯一の古い木造の捌相殿五重塔があります。初重と2重が「方五間」で、日本の仏塔の「方三間」と異なります。他にも木造の仏塔はありますが、いずれも近代に入って建てられた新しいものです。

2. 日本の仏塔

我が国の仏塔初見は、『日本書紀』敏達天皇14年条にある「春二月蘇我大臣馬子、塔を大野ヶ丘の北に立てる」です。然し、この塔がどのような形だったかは判っていません。

形が明確なのは『日本書紀』推古天皇元年条に「春正月、仏の舍利を以って法興寺の刹（せつ）の柱の礎（つみし）の中に置き、柱を立つ」とある「法興寺五重塔」通称、飛鳥寺五重塔です。残念ながら、この五重塔は建久7年（1196）、火災で焼失したので見る事が出来ません。

明日香村の安居院（あんごいん）には、仏舍利を納めた五重塔を中心に置いて、これを三金堂が囲むという飛鳥寺の伽藍配置復元図があります。昭和23年、旧飛鳥寺の発掘調査で五重塔の心礎が見つかり、そこから金銅製の舍利容器が発見され、『書紀』の記述が証明されました。

我が国に現存する一番古い仏塔は、法隆寺五重塔です。

法隆寺五重塔は、推古天皇15年（607）に創建されましたが、『日本書紀』天智天皇6年条（670）に「夜半之後（あかつき）に、法隆寺災（ひつ）けり。一屋（一つのいえ）も余ることなし」

とあるように落雷で焼失しました。(『日本書紀』(五) 岩波文庫)

現存の五重塔は和銅元年(708)に再建されたものです。

大正15年(1926)の発掘調査で、地中約1.5mにある心礎から舍利容器が見つかり、その中に仏舍利が確認されました。

心礎とは、塔の構造体の礎石と違って、仏塔の中心にある仏舍利を納める神聖なものです。

その心礎からは心柱(しんばしら)が立ち上がり、仏塔の中心を通過して屋根の上に聳える相(そう)輪(りん)へと繋がっています。従って心柱も相輪も仏舍利同様に神聖なものとして扱われています。

神道でも聖なる木に神が宿ると言われ、伊勢神宮御正殿には心(しんの)御柱(みはしら)があり、その真上には御神体である「八咫(やたの)鏡(かがみ)」が安置されています。

3. 日本の三重塔と五重塔

我が国には国宝と国の重要文化財の三重塔と五重塔が82基あります。無指定というのは、国の文化財に指定されていないが、旧来の仏塔の造り方を踏襲した三重塔・五重塔です。約70基あります。他に本来の仏塔の目的と違って、納骨堂などに使われている三重塔・五重塔の姿をしたものが数百基存在します。

計	五重塔	三重塔	
24	11	13	国宝
58	14	44	重文
70	19	51	無指定
152	44	108	計

4. 神奈川県にある塔 建立順

下図1と2は、明治以前に立てられた仏塔です。3は、川崎大師の平間寺五重塔で、珍しい八角形をした塔です。(RC造り)

孝謙天皇発願によって開山された大和西大寺には、幻の八角七重塔の礎石が残っています。仏塔は当初、八角七重で計画されましたが財政事情が逼迫し、急遽五重塔に変更されて建立されたという経緯があります。(五重塔は平安時代に焼失)昭和31年の西大寺の発掘調査で、八角七重塔の礎石が見つかり八角七重塔の伝承が裏付けられました。

	仏塔名称	指定	所有者	建立年	総高	所在地
1	旧燈明寺三重塔	重文	三溪園	康正3年(1457)	23.9m	横浜市本牧
2	龍口寺五重塔	なし	寂光山龍口寺	明治43年(1910)	30.3m	藤沢市片瀬
3	平間寺五重塔	なし	金剛山平間寺	昭和59年(1984)	31.3m	川崎市川崎区
4	泉竜寺三重塔	なし	忠和山泉竜寺	昭和61年(1986)	15.0m	相模原市上鶴間
5	香林寺三重塔	なし	南嶺山香林寺	昭和62年(1987)	30.3m	川崎市麻生区
6	聖徳寺五重塔	なし	久里浜霊園	昭和63年(1988)	18.0m	横須賀市田戸台
7	法船寺五重塔	なし	済度山宝泉寺	平成5年(1993)	8.5m	小田原市酒匂
8	大楽寺三重塔	なし	大楽寺	平成5年(1995)	14.0m	川崎市中原区
9	浄発願寺三重塔	なし	浄発願寺	平成12年(2000)	16.63m	伊勢原市日向

『日本霊異記』に「我は永手(ながて)なり(中略)西大寺の八角の塔を四角にし、七層を五層に減じき。この罪に由りて(中略)我を閻魔大王の闕(みかど)に召し、火の柱を抱かしめて、挫(へし)釘(くぎ)もって我が手の於(うえ)に打ち立てて(後略)」という記述があります。(『日本霊異記』(下)学術文庫)藤原永手は北家房前(ふささき)の子で、不比等の孫ですが、閻魔様も惨いことをなさいます。

因みに、長野県上田市別所には安楽寺八角三重塔(国宝)があります。

5. 神奈川県にある明治期以前の三重塔・五重塔

新しい仏塔を評価しない訳ではありませんが、明治期以前に立てられた仏塔には、長い時代を生き抜いてきた逞しさがあり、気品と風格が感じられます。

神奈川県に2基ある明治期以前に建立された、藤沢市の龍(りゅう)口寺(こうじ)五重塔と横浜

市三溪園の旧燈(とう)明寺(みょうじ)三重塔を重点に話を進めます。

①龍口寺五重塔

明治期、仏教活動が制約されるなかで、全国に4基の五重塔が建立されました。その中の1基が龍口寺五重塔です。

五重塔は、明治30年14代日蓮上人が願主となり、大棟梁は竹中籐右衛門などによって明治43年に落成しました。

檜造りの五重塔は、和様と禅宗様式が混ざった仏塔です。屋根は本瓦葺、初重の中央間が棧唐戸、脇間に連子窓があり、斗拱は基本的な三手先組、軒は二軒繁垂木です。

5重目の軒回りは平行垂木ではなく、唐様の扇垂木です。扇垂木は鎌倉時代以降の仏塔によくある禅宗様式です。

初重の中備え(臺股)には、異なる三つの彫刻が見られます。彫刻は二重から四重は中央間のみで、脇間は蓑束です。中備えとは梁の上で軒桁を支える構造部材です。

*龍ノ口の法難

日蓮上人は時の幕府を批判したとして捕えられ、龍ノ口で斬首刑に処せられることになりました。首切り役人の刀が、まさに日蓮上人の首を切り落とさんとした時、江の島の方角から強烈な光の玉が走ってきて、首切り役人の刀が止まりました。

そこに、鎌倉から早馬がやって来て、日蓮上人の斬首刑を取り止め、佐渡への遠島が告げられました。

龍口寺は延元2年(1337)日蓮上人の弟子日法によって、刑場跡に建てられた寺院です。

②旧燈明寺三重塔(重要文化財)

三溪園の三重塔は、大正3年(1914)原三溪(富太郎)が山城国の旧燈明寺から移築しました。総高は23.9mで、すっきりとした感じの純和様の美しい仏塔です。

初重には須弥壇が設けられ、中央は板唐戸という飛鳥時代から用いられている古い扉です。脇間は連子窓、中備えは間(けん)戸束(とつか)というシンプルな束を置いています。軒は二軒繁垂木で、屋根は本瓦葺、四隅の稚児棟には鬼瓦がありますが、これは旧来のものではありません。平瓦や軒丸瓦に東明寺の文字が見られます。

寺は寛文元年(1661)天台宗から日蓮宗に改宗した際に、寺名を燈明寺に変えていますので、この瓦は創建当初の東明寺時代の古い瓦です。

原三溪(旧姓青木富太郎)の生家の近く、岐阜県安八郡神戸に日吉神社三重塔(重要文化財)があります。

三溪は幼い頃、この三重塔を眺め育ったのではないかと思います。彼が幼児体験で得た、美しい三重塔の姿が脳裏から離れずにいたところへ、燈明寺三重塔売却の話を耳にし、これから造ろうとする自分の庭に、是非、美しい三重塔を置きたいと思ったのではないかと考えます。

日吉神社三重塔も旧燈明寺三重塔も、同じ室町時代に建てられた純和様の美しい仏塔です。

山背国の東明寺は、聖武天皇の勅願により行基が開山した名刹ですが、建武の兵乱で荒廃し康正3年(1457)天台宗の忍禅上人が復興、本堂と三重塔を建立しました。

相楽郡加茂(現・京都府木津川市加茂町)にあった燈明寺は廃仏令で廃寺となりましたが、寺跡には御霊神社があり、その右奥に燈明寺三重塔の跡が残っています。

旧燈明寺三重塔は、関東6県に9基ある重要文化財三重塔・五重塔の中でも最も古く、室町中期の

ものです。

大池越しに見られる三重塔は、四季折々の違った景観の中で、美しい姿を見せてくれます。

昔から、旧暦の8月15日の「十五夜」と9月13日の「十三夜」の月は、1年の内で最も美しいとされてきました。

平安時代、貴族の邸では「月の宴」が開かれ、江戸時代中期になると、庶民の家でも軒先に薄と御団子を備え、観月が行われました。

『源氏物語』須磨の巻にも、都落ちした光源氏が「月のいと華やかにさし出でたるに、今宵は十五夜なり」と、内裏で行われた「月の宴」を偲ぶ、感傷的場面があります。(『源氏物語』与謝野晶子 角川文庫)

三溪園では中秋の名月の前後、三重塔はライトアップされ、夜間、臨春閣(重文)を特別に解放し、管弦を奏でる名月観賞会が開かれます。

「名月を取ってくれろと泣く子哉(かな)」(『一茶集』日本古典文学大系 58 岩波書店)

一茶の俳句は宝井其角と違って、誰にでも理解できます。名月を眺め、一茶を偲んでいると、一茶の居た200年前が身近に感じられます。古来、月は秋の景物として歌に詠まれてきましたが、人口に膾炙された歌に、「月見れば千々に物こそ悲しけれ 我が身ひとつの秋にはあらねど」があります。(『古今集』日本古典文学全集 小学館)

藤原定家が百人一首に取り入れたこの歌は、平城(へいぜい)天皇の玄孫、大江(おおえの)千里(ちさと)が詠んだものです。この歌は白居易の詩集『白(はく)氏(し)文集(もんじゅう)』「燕子楼中 霜月の夜 秋来たって只一人の為に長し」を元にしたとされています。(『和漢朗詠集』巻上秋285 講談社学術文庫)

富太郎は慶応4年、岐阜県厚見郡佐波村に青木久衛の長男として生まれ、地元の私塾で漢学、漢詩、絵画などを学びますが、幼い頃から傑出した才能の持ち主であったようです。

一時家業を手伝いますが、17歳になった富太郎は上京し、東京専門学校(現早稲田大学)で政治、経済を学び、卒業後は跡見女学校で教鞭をとりました。

ある日、富太郎が新橋駅に居たとき、前を通り過ぎようとした女性の下駄の鼻緒が切れました。富太郎は手ぬぐいを引き裂いて、彼女の下駄の鼻緒をすげ替えてあげました。

富太郎は何処かで見たことのある娘だと思います。後で、彼女は跡見女学校の教え子で横浜の豪商・原善三郎の孫の原屋(や)寿(す)だということが判りました。

これが縁で富太郎と屋寿との交際が始まり、後に、富太郎は原家の婿養子となりました。

明治35年(1902)、原富太郎(雅号・三溪)は横浜市本牧三之谷に本宅(鶴翔閣)を建てますが、この頃から三溪を名乗っています。

三溪は本宅のある175,000坪の敷地に庭園を造りますが、古建築にも関心が高かった三溪は、古都鎌倉、京都などにあった著名な古建築物を買って自分の庭園に移築しました。

現在、三溪園には重要文化財に指定された月華殿、聴秋閣、臨春閣、東慶寺仏殿など10棟の古建築物があります。

書画も嗜む三溪は、骨董品や美術品の収集家としても有名ですが、横山大観、下村観山、小林古径、前田青邨、安田靉彦など若い芸術家の育成援助にも力を注ぎました。

そんな三溪も関東大震災以降は、好きな美術品、骨董品集めもぷつりと止め、妻の屋寿と共に、私財を投げ打って復興事業と慈善事業に身を挺しました。 終わり